
はじめに

本 書は、これからレポート・卒論を書く若者のための本である。こうした文書を書いたことがない若者や、書こうと思って苦しんでいる若者のための入門書だ。理系文系は問わない。どんな分野にも通じるように書いた。

みなさんはおそらく、小学校・中学校・高校の国語の時間に作文や感想文をたくさん書いてきたであろう。そして大学に入って突然、レポートや卒論なるものの提出を求められるようになったに違いない。ところが、高校までの作文・感想文のつもりでレポート・卒論を書くと、とんでもない失敗をすることになる。レポート・卒論は、作文・感想文とはまったく異なるからだ。

良 いレポート・卒論を書くためにはまず、レポート・卒論とは何かを知ることが大切である。どういうことを書くことを求められているのか。どういう心構えをもって書くべきなのか。そして次に、レポート・卒論を書くために必要なことを学ぶ必要がある。序論・本論・結論等で書くべきこと。読者を説得するために必要なこと。などなど、知っておかなくてはいけないことはたくさんあるのだ。むろん、わかりやすい文章を書くための技術も身につけなくてはいけない。

本 書には、こうしたことをすべて書いている。つまり、これからレポート・卒論を書く若者にとって必要なことをすべて書いた本である。本書はきっと、レポート・卒論を書くために役立つと信じている。

私 は、東北大学の准教授であり、生態学（生物学の一分野）の研究者である。自分の専門分野の論文を書いてきたし、学生の論文執筆指

はじめに

導もしてきた。この経験を基に、2002年に、「これから論文を書く若者のために」という本を書いた(2006年に大改訂増補版を出した)。これは、大学院生や若手研究者を対象に、学術雑誌に掲載する論文を書く技術を解説した本である。2004年からは、東北大学の全学部(理・医・歯・薬・工・農・文・教・法・経)の一年生を対象に、レポート作成法を講義している。これは、「大学生のための情報検索術」という講義の一環である。この講義の受講生は、自由課題のレポートを半年かけて執筆し提出する。この講義(および学生が提出したレポート)を通して私は、レポートの書き方に関していろいろ考えることができた。そして、これまでに培ったことを本にしようと思った。専門分野の論文執筆から学んだことで、レポート・卒論の執筆に活かせること。レポート作成法の講義を通して学んだこと。それらをすべて本書に書いた。

本 書では、東北大学の学生が書いたレポートを多数紹介している。これらはみな、「大学生のための情報検索術」の課題として提出されたものである。レポートの紹介に当たっては、書いた当人の許可を得るようにした。「東北大レポートより」とあるものは、許可を得たレポートである。しかし、連絡を取れなかった学生も多い。そういう場合は、そのレポートを元に私が創作をした。それらには、「東北大レポートを元に創作」と記している。ただし、タイトルのみを紹介したものについては、引用許可を取るまでも無いと判断した。

本書の構成

本 書は三部構成である。第1部では、レポート・卒論とは何かを解説する。高校までに書いていた作文とはいかに違うのかを知って欲しい。第2部は本書の核となる部分である。レポート・卒論を書くために必要なことすべてを解説している。ここを読めば、レポート・卒論の各章で何を書くべきなのか、どのように書くべきなのかはわかるはずである。第3部は文章技術の解説である。わかりやすい文章を書くために必要な技術を徹底的に解説している。

本書が対象とする読者

本

書が対象とする読者は、「これからレポート・卒論を書く若者」である。具体的には、次のような人たちを想定している。

- これからレポートを書こうとしている学部生・専門学校生。理系文系は問わない。レポートとは何なのかを知り、学術的価値のあるレポートを書くように頑張ってもらいたい。
- これから卒論を書こうとしている学部生。やはり、理系文系は問わない。卒論はまさに学術論文であり、レポートより一段上の存在である。本書の内容が、卒論を書く上で役立つことを切に願っている。
- 学生のレポート・卒論書きを指導する側の人々。教える側の理論武装の一つとして本書を役立てて欲しい。
- さらに高みを目指す高校生。本書は、高校生にも役立つはずである。
- 社会人となって、ビジネスのためのレポートを書こうとしている若者。本書の内容は、こうしたレポート執筆にも役立つはずである。

なぜ、サッカーの喩えなのか

本

書では、サッカーの例を用いた説明をしばしば行う。これは、私がサッカーを愛しており、そして、日本にサッカー文化が根づくことを切に願っているからである。サッカーとは関係のない場面にも、ごく自然にサッカーの話が出てくるのが私の夢なのだ。また、仙台市に所在し、宮城県民のＪリーグクラブであるベガルタ仙台も随所に登場する。これも、ベガルタ仙台を私が愛しているがゆえである。確かに、浦和レッズとかガンバ大阪とか、全国的に有名なクラブを例にした方が多くの方には馴染みやすいことは認めよう。しかしそれは私にはできない。Ｊリーグクラブを例に使うなら、ベガルタ仙台でなくてはいけないのだ。

はじめに

古本を売買しないで

— つ、お願いがある。本書を古本で売買しないで欲しい。古本は、紙が汚れている程度で、本の持つ情報はまったく劣化していない。古本の売買は、著作権者から購入すべき情報を売買することである。しかし古本が売れても、著作権者に印税はまったく入らない。断っておくと、私は、印税は当然の報酬であると思っている。もちろん、本書執筆の動機は、レポート・卒論執筆に苦しむ若者を少しでも助けたいという思いであった。そして実際に、本書が役に立ったという話を聞くと、とても嬉しく思う。この感情は、金銭うんぬん抜きに純粹なものだ。一方、何ヶ月もの間、全知力・全精力を振り絞って本書を書いたことも忘れないで欲しい。これへの対価を求めてはいけないのか？ だから皆さん、古本を売買しないで。本書が役に立ったと少しでも思って下さるのなら、この私の願いをどうか聞き入れて欲しい。不要になったのなら資源ゴミに出そう。要するに本は紙。「資源ゴミに出すより古本として売の方が本を大切にしている」なんてことはないのだ。

さらなる高みへ

大 学院に進もうと考えている方へ。大学院は、学術的な研究をするところである。そして、あなたの研究成果を、論文として学術雑誌に発表することが使命となる。その執筆は、レポート・卒論の執筆よりもはるかに大変だ。しかし臆することなく挑んで欲しい。

大学院では、以下の本が役に立つと思う。

酒井聡樹 (2006) 『これから論文を書く若者のために：大改訂増補版』 共立出版

本書の姉妹書であり、学術雑誌に発表する論文の書き方を解説した本である。

謝辞

本

- 書を書く上で、以下の方々にお世話になった。篤くお礼申し上げる。
- 竹中明夫さん・牧野崇司さん・酒井暁子（私の妻）には、原稿を読んでいただき、貴重なご意見を頂戴した。私は、お三方のご意見に従って原稿を大幅に直した。おかげで原稿はずいぶんと良くなったと思う。
 - 「倒れた隣家の庭木」という文の問題点（第3部3.4.1節；p.201）は、牧野崇司さんが指摘したものである。この問題点について考えることが、第3部第3章を書く一つの動機となった。
 - 三中信宏さんは、説得力のある主張とはどういうものなのかご教示下さった。
 - 米澤 誠さんを始めとする東北大学附属図書館の方々は、東北大学の講義「大学生のための情報検索術」を企画立案し、私を講師の一人にして下さった。この講義の講師となったことが、本書執筆につながった。
 - 「大学生のための情報検索術」の受講生が提出したレポートは、レポートの書き方を考える良き材料となった。本書があるのも、この講義を受講したみなさんのおかげである。
 - 東北大学附属図書館の佐藤初美さんは、本書執筆に関して色々お手伝い下さった。
 - 共立出版の信沢孝一さんは、本書執筆の申し出を快諾して下さいました。そして、出版のために色々とお骨折り下さった。
 - 東北大学生物学科の学生——青木信策さん・石井宏憲さん・菊地 諒さん・武田 悠さん・竹原正貴さん・田中祐子さん・羽田野 愛さん・林 文さん・丸岡玉枝さん・山脇琢磨さん・和田慎一郎さんは、元気一杯の表紙のモデルになってくれた。立派な卒論を書くようにね。